

埼玉大学と埼玉県立大学の共同研究報告書

		氏名	所属・職名
	埼玉県立大学研究者	森田 満理子	保健医療福祉学部社会福祉子ども学科福祉子ども学専攻・准教授
1. 研究担当者	埼玉大学研究者	小谷 宜路	教育学部附属こどもの育ち応援センター・副センター長
		関 由紀子	同センター長, 教育学部・教授
		小田倉 泉	教育学部・准教授
		寺薗 さおり	教育学部・准教授
2-1. 研究課題	保育職を対象としたリカレント教育の内容及び方法に関する実践的検討		
2-2. 研究目的	保育職に対するリカレント教育の在り方を検討するため、探究型かつ日々の実践との往還型研修会を試行し、その効果を考察することを目的とする。		
2-3. 研究内容	両大学の保育者養成課程を卒業した保育者を対象とした研修会を実施し、研修後数ヶ月経過後の研修参加者へのインタビュー調査を通した質的分析によって研修後の保育に係る認識の変化等の内容を明らかにし、研修の効果と課題を考察する。		
3. 当概年度に実施した内容 (共同で記入)	2024 年 11 月 30 日(土)、埼玉県立大学および埼玉大学の保育者養成課程を卒業した現職の保育者を対象とした研修会を、埼玉大学教育学部附属こどもの育ち応援センター(埼玉大学教育学部附属幼稚園内)にて開催した。研修は、参加者が実践を学びあう探究型研修を通して、所属する園での研修後の実践をよりよいものにする往還型を指向したものであった。参加者は、経験年数 1 年目から 6 年程度以下の保育者8名(幼稚園 6 名・保育所1名・母子生活支援施設1名)であった。研修内容は、2つであった。1つは意見交換であり、8 名全員が輪になって各自の好事例を出し合った(約 100 分)。2つめは、埼玉大学教育学部附属幼稚園の保育室等の見学であった。休日で幼児のいない状態で、幼児が継続して遊んでいる場や物が置かれた保育室等であり、見学者がその場の保育実践をイメージしやすい状態であった(約 15 分)。 研修参加者へのインタビュー調査を実施し(3 月 24 日(月)・25 日(火)・27 日(木))、研修後の保育に係る認識の変化等を質的分析によって明らかにして、研修の効果と課題を考察することを目指している(「保育職を対象としたリカレント教育の内容及び方法に関する実践的検討(1)ー保育職研修における保育者の経験を視点としてー」(埼玉県立大学研究倫理委員会通知番号 24150)。		
4. 当該年度に得られた成果	本研究で実施した研修会は、共同研究助成年度に限っての実施ではなく、今後継続して実施していく研修会「サイサイホイの会」として発足させることができた。参加者からは、他園の保育者・経験年数の異なる保育者と、保育の楽しさ・子どものおもしろさを語り合えたこと、園見学できたことの楽しさが語られた。研修で得た刺激を早速実践に生かした、より挑戦的に手応えある保育を行えたことなども語られた。		
5. 現状の課題と今後の見直し・展望			
今後、インタビュー調査で得られたデータについて質的分析を行い、研究目的を達成し、論文化して公表する。また、研修を継続して効果の検証も続ける。参加者が同じ大学を卒業しているという共通の背景は、経験年数が異なるという条件が重なると、緊張感を高める要因にもなる。毎年新参加者を迎える研修が、安心感に支えられるものであり、参加者が高い質で協働して学び合う仲間にならねば育つよう、研修参加者・運営者の経験の積み重ねが必要である。 研修実施前、両大学の学部 3・4 年生にも参加希望者を募ったが、参加者はいなかった。まず、在学生が通常授業において学年を超えて共に学び合う体験を通して学生自身が啓かれる実感をもつことが学びへの渴望を喚起するために必要であると仮定し、本研究以外の授業での工夫・改善の着想を得て着手し、効果の実感を得た。研修に両大学の学部学生の参加も可能とすることで、養成段階の教育の在り方を広げる意義ももつと想定し、研修の充実を指向しながら、学部生の授業改善も図っていく。			